

コロケーションから見た中間構文の容認性

久井田 直 之

I はじめに

英語の統語形式〔名詞句＋動詞＋付加詞〕で示される中間構文 (middle constructions) は、¹⁾ 文型は自動詞文に酷似しているが、文意は受動文の意味となる特殊な構文で、多くの研究者を惹きつけてきた。

(1) Someone bribed the bureaucrats. (Keyser and Roeper 1984: 381)

(2) Bureaucrats bribe easily. (ibid., 381)

他動詞文である (1) の目的語である bureaucrats が、中間構文である (2) では主語になり、「官僚は簡単に買収される」という受動文の意味を持つ。しかし、吉村 (2001: 262) が指摘するように、²⁾ 中間構文の容認性は、文脈的サポートなどでも大きく変わり、英語の母語話者が示した (2) のような例であっても、容認性に揺れがある。

本論文の目的は、先行研究が示した容認される例、そして？や*の印がついている容認性が下がると示されている例をいくつか取り上げ、コーパス (COCA) を用いてコロケーション調査を行い、³⁾ 中間構文の容認性の揺れの要因を探ることである。

本論文の構成は次の通りである。II 節では中間構文の特性を整理する。III 節では、本多 (2005) と中村 (2010) に先行研究として触れる。IV 節では、本論文で取りあげた例のいくつかをコーパスを用いて検証する。そして、最後の V 節でまとめを行う。

II 中間構文の特性

本節では、中間構文の特性を容認性との関係を例文とともに考察し、整理していく。

¹⁾ 中間構文には様々な呼び方がある。例えば、Oosten (1977) の patient-subject construction のような呼び方もあるが、本論文では、広く使われている Keyser and Roeper (1984) の middle constructions を用いる。

²⁾ 吉村 (2001: 311) は、インフォーマント調査の際、主語名詞の bureaucrats が bribe で表された行為の動作主体でないことのみを提示したと説明している。

³⁾ 本論文では、Corpus of Contemporary American English (COCA) 450 million words を用いる。

1 統語形式 [名詞句+動詞+付加詞]

中間構文の統語形式 [名詞句+動詞+付加詞] は、多くの例が共有する典型的な形で、付加詞がないものは、属性の描写の観点から容認されない、または容認性が下がる。

(3) a. This shirt washes easily.

b. ?This shirt washes.

(a: Fellbaum and Zribi-Hertz 1989: 8)

(4) a. This dress buttons.

b. ??This dress fastens.

c. This dress won't fasten.

(a-c: Fagan 1988: 201)

(3a) は典型的な中間構文の例であり、(3b) は副詞がないために容認性が下がる。シャツを洗うことができるのは周知のことで、属性描写としては不十分である。次の(4)は、(4b)の容認性が下がるのに対して、(4a)は副詞がないが、ボタン式のドレスの属性が示されているために容認される。しかし(4b)も、他のドレスはしめることができないが、このドレスはできるというような特殊な場面であれば、容認される。最後に、(4c)は否定のwon'tがあることで、しまらないドレスという属性を示すことで容認される。中間構文の容認性は、百科事典的知識に基づいて、属性の情報価値が低い場合に下がると言える。

2 潜在的な動作主

受動文の動作主を示すby句が中間構文では明示されることができない。Fellbaum (1985)は、中間構文の動作主は、“people in general”，総称的な潜在的な動作主の存在で、中間構文に明示的な動作主が明示されないとしている。

(5) a. *This book reads easily by people.

b. *This book reads easily by Jack.

3 現在時制と自動詞文

中間構文は、主語の属性を示す文で、その多くは現在形を用いる。そのために、現在形で示される属性を示す自動詞文との関連が指摘されている。

(6) a. Managers manage.

b. Fire destroys.

(a-b: Fagan 1988: 196)

(7) Dogs bark.

(坂本 2003: 174)

(8) Some people cry easily.

(Yoshimura and Taylor 2004: 317)

(6a) や (6b) は他動詞の目的語が明示されずに、属性を示す自動詞文となる例、(7) や (8) は非能格動詞で属性を示している。次に能格動詞の例を見られたい。

(9) The door closes easily. (Fellbaum 1986: 6)

(10) a. The door closes easily; it only takes a gust of air.

b. The door closes easily; you just have to press down. (a-b: *ibid.*, 6)

(9) について、Fellbaum (1986) は自動詞文としての解釈 (10a) と中間構文の (10b) の解釈が可能であると説明する。(10b) の説明にあるように、you (人、ここでは不特定の人) が動作を行うことによって、中間構文の読みが成立する。この潜在的な動作主の読み込みは中間構文の特性であり、自動詞文 (非能格文) の (8) のような例も動作主の読み込み次第で、中間構文になりうる。

4 中間構文の主語

主語が人のため容認されない例や主語と動詞の組み合わせで容認されない例が多いのも中間構文の特性である。

(11) *The boss handles easily. (Fellbaum 1986: 12)

(12) a. This piano plays easily.

b. *This sonata plays easily. (a-b: *ibid.*, 13)

(13) a. Bean curd digests easily. (Lakoff 1977: 248)

b. *Bean curd eats easily. (*ibid.*, 248)

(11) は (2) のように、人を表す主語のため、自動詞文としての解釈が自然で、動作主を読み込む場合は容認される場合がある。次に、(12a) がピアノの弾きやすさを示すのに対して、(12b) は、主語のソナタの「弾きやすい」という属性には、演奏者の技術が影響するため、ソナタそのものの持つ属性とは言えずに容認されない。最後に (13a) は、主語の bean curd (豆腐) の属性が動詞 digest (消化する) によって示されるが、(13b) は、動詞 eat が動作主志向の動詞で、豆腐の属性との結びつきが弱いために、容認されない。⁴⁾

これまで見てきたように、中間構文において、主語の名詞と、動詞句 (動詞と付加詞) の組み合わせが容認性に大きな影響を与える。Lakoff (1977: 248) は主語と動詞句の関係に注目し、中間構文の主語について、主語らしさ (Subjecthood) の3つの要素 (Primary Responsibility, Control, そして Volition) の中で、次の (14) のような中間構文の主語は、Primary Responsibility (以後、PR) を満たしていると述

⁴⁾ インフォーマントから、eat の主語は人というイメージが強く、奇妙な英文であるとのコメントを得た。コロケーションによる影響とも考えられる。

べている。

(14) The car drives easily. (Lakoff 1977: 248)

そして、吉村 (1995) が Lakoff (1977) の PR の定義の曖昧さを指摘し、PR を独自に定義した。定義は以下の通りである。

(15) PR : ある行為が対象の属性に関与する仕方で行われていると見なされるとき、その属性が行為に対して持っている原因性 (吉村 1995: 280)

(15) の定義に従えば、(12b) の *sonata* と動詞句 *play easily*, (13b) の *bean curds* と動詞句 *eat easily* の間に PR がいないために容認されないと言える。中間構文の容認性は、主語が動詞句の示す行為に対して PR を持つかどうかに影響を受けると考えられる。

5 付加詞とコントラスト

中間構文は主語の属性を示す文であるために情報価値が重要となる (cf. (3b))。ゆえに付加詞や主語につく *this* や *these* などの指示代名詞が、コントラストを生じさせ、情報価値を高めると容認性が上がる。

(16) a. Our Japanese cars handle well / smoothly / easily. (Fellbaum 1985: 24)
 b. *Our Japanese cars handle expertly / cautiously / carefully. (ibid., 24)

(17) a. This wine drinks like it was water. (Oosten 1977: 459)
 b. A good tent puts up in about two minutes. (ibid., 459)
 c. A baby washes more easily than an armadillo. (ibid., 470)

主語の属性を示す副詞がある (16a) に対して、(16b) は、潜在的な動作主を修飾する副詞で、中間構文には用いることができないとされている。また、一語の副詞ではなく、容認性を上げる付加詞が付いていることで、コントラストが生まれ、(17) の例は容認される。

ここまでの II 節では、先行研究が指摘してきた中間構文の特性を整理した。次節では、本論文の考察を支える二つの先行研究を取り上げ、その関連性や問題点を述べたい。

Ⅲ 先行研究

本節では、本多 (2005) と中村 (2010) についてまとめ、本研究との関連性を示す。

1 本多 (2005)

本多 (2005) は、中間構文を生態心理学の観点から捉え、探索活動とアフォーダンスを用いて、⁵⁾ 中間構文の生起プロセスと特性を示している。ここでは、本多 (2005: 93) の中間構文の定義の中で、本論文の容認性の考察に関わる次の三つを取り上げる。

- (18) a. 中間構文の述語動詞は探索活動を表す。
- b. 中間構文の動詞句は主語の指示対象が持つアフォーダンスを表す。
- c. 中間構文は、文全体としては、探索活動の結果生じる知覚者・行為者にとっての対象の見え (ただし視覚のモダリティに限定されるものではない) を表現している。

中間構文の容認性は、Ⅱ節で見たように、情報価値や主語の名詞が PR を持つかどうかに影響を受ける。そして、(18) のアフォーダンスも容認性に影響を与える。中間構文は、知覚者や行為者の捉え方を示すもので、その容認性は、中間構文で示された捉え方を知覚者や行為者同様に、探索活動を通して動詞句の示すアフォーダンスを捉えることができるかに依存する。したがって、容認性の高い中間構文は、探索活動を通じて、文が示したアフォーダンスが多くの人に共有された文であると言える。そして、このアフォーダンスを支える要素として、百科事典的知識がある。例えば、“This book reads easily.” は容認性が高く、“This book throws easily.” は容認性が低い。その理由は、本から「読む」という行為はアフォードできるが、「投げる」という行為は本来の本からアフォードする行為と異なるからである。この判断に百科事典的知識が関わっており、本論文は、コロケーションに関する知識もその知識の中に含まれていると考える。中間構文の容認性の判断の際に、コロケーションの知識を含む百科事典的知識が働くと仮定すれば、コーパスを用いたコロケーション調査が容認性の揺れを探るために有効な手段であると考えることができる。Ⅳ節でその調査を行う。

⁵⁾ 探索活動については、佐々木 (1994: 63-64) は、知覚者の知覚成立のための探索活動とアフォーダンスについて、次のように述べている。

アフォーダンスは刺激ではなく、「情報」である。動物は情報に「反応」するのではなく、情報を環境に「探索」し、ピックアップしているのである。したがって、アフォーダンスが利用される背景には、時間の長短はあれ、必ず探索の過程を観察することができる。(中略) アフォーダンスは、刺激のように「押しつけられる」のではなく、知覚者が「獲得し」、「発見する」ものなのである。

そして、アフォーダンスについては、本多 (2005: 56) も参考になる。

ある事物のアフォーダンスとは、その事物がある環境の中でそれぞれの知覚者に対して持つ意味である。より具体的には、環境の中でそれぞれの知覚者に対して持つ意味である。たとえば椅子は人間に対して「座る」という行為をアフォードする。

2 中村 (2010)

中村 (2010) は、中間構文におけるプロトタイプとプロトタイプからの拡張を、コーパスの頻度 (粗頻度) と MI スコアによる相互予測性に基づいて指摘し、⁶⁾ 容認性と関係性の考察を試みた。そして、中間構文の主語と動詞の組み合わせと、他動詞文の動詞と目的語が相関関係を持ち、相関関係が高ければ、容認性が高くなることを三つの例で示した。ここでは、二つの例を取りあげる。

一つめの例は、名詞 book と動詞 read の関係で、book の場合、read と write がよく共起するが、read のみを中間構文のプロトタイプと指摘した。その際に、write はコーパスのデータからはプロトタイプではないと言えないものの、write が作成動詞である点と中間構文で示される行為の再現性の点から、write は中間構文ではないと結論付けた。二つめの例は、名詞 ball と動詞 kick の関係で、ball とよく共起する動詞として、hit, play, kickなどをコーパス分析により示した。その中で、play と ball の相関関係については、サッカー選手の場合、名詞 ball を football と捉える傾向があることによる共起であると説明し、kick と ball の相関関係について、ball を soccer ball とすると、容認性が上がることを示した。⁷⁾

中村 (2010) は、コーパスの頻度情報を基に容認性と共起の関係を考察する画期的な試みを行ったが、名詞と動詞の共起のみをコーパスで分析した点に問題が残る。特に、中間構文は冒頭でも述べたように、統語形式 [名詞句 + 動詞 + 付加詞] で示される文で、付加詞、特に副詞の役割は非常に重要である。例えば、中村 (2010) の一つめの例については、book の属性を示すためには、easily のような副詞が必要であり、動詞 read と write と、副詞 easily の関係を MI スコアで分析すると、read が 1.22, write が -0.86 と極端に write の数値が低くなる。中間構文の動詞句全体にも目を向け、副詞も含め、共起関係を考察すると、さらに多くの例の検証が可能であると本論文は考える。

Ⅲ節では、本多 (2005) と中村 (2010) を通して、中間構文の容認性において、アフォーダンスとコロケーションの重要性を確認した。次節で、具体的な調査を行う。

IV コーパスを用いた調査

本節では、第 I 節と第 II 節で取りあげた例文の中から、人を表す Bureaucrats が主語の (2)、副詞のない (4 a-b)、二通りの解釈が可能 (9)、最後に主語が同じで動詞の異なる (13a-b) の例をとりあげ、COCA のコロケーション調査を行う。この調査を通して、なぜ容認性に揺れが生じるのか、そしてどのような名詞や副詞が、中間構文の容認性を上げる可能性があるかを考察する。

⁶⁾ MI-score (mutual information score) について、Hunston (2002: 71) は 3 以上で興味深いコロケーションと述べており、IV 節はその数値を参考にした。

⁷⁾ 坂本 (2003: 184, 192) は、?This type of ball kicks/hits easily は「野球選手やサッカー選手のように、ボールとの相互作用が習慣化している場合には、容認度があがることが予想される」と述べており、中村 (2010) はコーパスを用いて、そのことを論証したとすることができる。

1 主語が人を表す例

これまで確認してきたように、中間構文は人が主語になる場合、容認性に揺れが生じる。ここでは、次の(19)のコロケーション調査を通して、容認性が揺れる理由を探る。動詞 *bribe* の後続二語以内に共起する名詞に特徴がないか、(19)のような *bureaucrat(s)* が共起しないかを調べ、まとめたものが表1である。同様に、動詞 *bribe* の後続三語以内に共起する副詞の調査結果が表2である。⁸⁾

(19) *Bureaucrats bribe easily.* (= (2))

表1 動詞 *bribe* に後続する名詞

	語	頻度	MI
1	officials	77	7.6
2	way	44	4.11
3	police	24	5.48
4	guards	15	8.06
5	government	12	3.47

表2 動詞 *bribe* に後続する副詞

	語	頻度	MI
1	away	5	1.46
2	once	3	1.04
3	literally	2	3.97
4	certainly	2	1.88
5	either	2	1.37

表1が示すように、動詞 *bribe* の後に続く名詞として、*public officials* のような形容詞で修飾される *officials* や *police* のような人を表す語が現れる。このことは、動詞の意味からも自然なことであるが、上位語には *bureaucrat(s)* は含まれず、*bureaucrat(s)* の例は下位にも見つからなかった。COCA内の頻度では、*bureaucrat(s)* が3091例であるのに対し、似た意味を持つ *government official(s)* は4222例であった。このことから、例えば、*Government officials bribe easily* のような例の方が、(23)よりも容認性が高い可能性があると推測できる。一方で、表2の副詞の共起語からは、中間構文の容認性に関わるような特徴は見られなかった。本多(2005)で確認したように、主語の指示対象が持つアフォーダンスを示す動詞句の一部を副詞が成すことから、副詞の検索はこのコロケーション調査も必要である。

2 副詞のない例

中間構文に副詞が伴わない例は稀で、副詞を伴わずに容認される理由は主語の名詞にある。コロケーションの観点から(20a)が容認される理由と(20b)の容認性が下がる理由を探る。

(20) a. *This dress buttons.*
 b. ??*This dress fastens.* (= (4))

⁸⁾ 動詞に後続する名詞については二語以内、副詞については、頻度とスコアの関係を考慮し、MIスコア1以上かつ三語以内で検索する。以降の検索も同様に行う。(表7を除く)

表 3 動詞 button に後続する名詞

	語	頻度	MI
1	shirt	99	9.68
2	coat	45	8.73
3	jacket	23	8.00
4	pants	18	7.73
5	blouse	11	9.15

表 4 動詞 fasten に後続する名詞

	語	頻度	MI
1	seat	126	8.32
2	seatbelt	27	12.92
3	belt	24	7.38
4	seatbelts	18	13.35
5	eyes	15	3.21

表 3 の上位 3 語は服で、動詞 button が服と強い結びつきを持っていることがわかる。そのことが This dress buttons の容認性に影響していると考えられる。一方、動詞 fasten の場合は、服よりも belt の方が共起しやすく、MI スコアも高い。結びつきが強いことが顕著である。このことから、服を示す名詞を主語に持つ中間構文よりも、This seatbelt fastens のような例のほうが、容認性が上がる可能性があると予測できる。

表 5 動詞 button に後続する副詞

	語	頻度	MI
1	up	277	4.89
2	down	67	4.09
3	tight	14	6.18
4	over	12	1.16
5	right	11	1.24

表 6 動詞 fasten に後続する副詞

	語	頻度	MI
1	together	50	4.44
2	down	27	1.91
3	around	22	2.11
4	securely	16	9.68
5	tightly	12	6.56

副詞については、button を動詞とする中間構文に用いられる可能性がある副詞は、表 5 からは見つけることはできないが、表 6 の securely や tightly は、seatbelt との共起があり、This seatbelt fastens tightly のような副詞を伴う中間構文にすると、さらに容認性が上がる可能性がある。

3 二通りの解釈が可能な例

自動詞文としての解釈と中間構文としての解釈の二通りが可能な文 (21) のコロケーションについては、動詞 close を中心に前後二語の間の名詞のコロケーションと三語以内の後続する副詞を調べた。結果が表 7 と表 8 である。

(21) The door closes easily.

(= (9))

表7 動詞 close に後続する名詞

	語	頻度	MI
1	eyes	10178	6.87
2	door	5015	6.15
3	doors	1089	6.28
4	gap	709	6.31
5	point	500	3.66

表8 動詞 close に後続する副詞

	語	頻度	MI
1	down	1986	3.37
2	up	1873	2.04
3	enough	971	3.64
4	together	677	3.46
5	off	599	2

表7が示すように、door(s) の頻度が多く、close との結びつきも強い。コロケーションの面からも、中間構文か自動詞文で現れた時にも容認性が高いことが示された。表8の副詞の共起について、上位に easily は現れず、副詞による容認性への裏付けは得られなかった。

4 主語が同じで動詞が異なる例

繰り返しにはなるが、最後に中間構文において、主語の名詞と動詞のコロケーションが重要であることを(22)の調査で確認したい。

(22) a. Bean curd digests easily.

b. *Bean curd eats easily.

(= (13))

表9 動詞 digest に後続する名詞

	語	頻度	MI
1	food	85	6.50
2	milk	41	7.84
3	information	41	5.04
4	lactose	22	12.84
5	news	17	3.81

表10 動詞 eat に後続する名詞

	語	頻度	MI
1	food	1332	5.07
2	lunch	987	6.77
3	dinner	947	6.02
4	disorders	847	8.18
5	breakfast	844	7.14

表9からも、動詞 digest の「消化する」という意味に関連性の強い名詞が後続に共起し、milk や lactose は digest との結びつきが強い。消化と乳糖の含まれる例文で確認されたい。(下線部筆者。以下同じ)

(23) Beginning in childhood, they gradually lose the ability to digest lactose (the principle sugar in milk) and suffer from diarrhea and cramping when they consume milk products.

(COCA Academic)

このことから、消化と結びつきの強い語が主語になり、Breast milk digests more easily than formula

のような例も可能と考えられる。⁹⁾ また, information を主語にして, The information digests slowly のような表現も容認できるというインフォーマントもいた. 一方で, eat は食事を表す名詞が後続に現れた. 中間構文の例がないか COCA の中で, “food eats well” で調べたが, 用例を見つけるには至らなかった. しかし, google で調べると, 用例が見つかる.

(24) “If your food eats well, you eat well.” (Web)¹⁰⁾

他にも例が見つかったことから, コロケーション調査から, 結びつきの強いことが確認された名詞は中間構文になる可能性があると考えられる.

表 11 動詞 digest に後続する副詞

	語	頻度	MI
1	slowly	23	5.58
2	then	17	1.08
3	easily	11	4.56
4	quickly	10	3.58
5	better	9	1.88

表 12 動詞 eat に後続する副詞

	語	頻度	MI
1	up	1490	4.89
2	too	968	6.44
3	well	629	5.68
4	away	597	6.91
5	together	484	6.26

最後に, 表 11 と表 12 の比較から, 表 11 の digest の後続には, 消化のスピードに関する副詞が並び, 主語との組み合わせ次第で, 中間構文の例も見つかるが, 表 12 の場合は, well (cf. (24)) 以外は中間構文に用いられそうにない.

(25) In winter, the pulpy remains of a withered fruit provide the bird with sugars, which it digests easily. (COCA Academic)

V まとめ

本論文では, 中間構文の特性を整理し, コーパスを用いて, コロケーションの視点から中間構文の容認性の揺れの要因を考察した. その結果, コロケーションの結びつきが弱いものは, 容認性に揺れが生じる可能性が高いことを確認し, コロケーション調査から揺れの少ないと思われる例をいくつか提示することができた. 今後は, このコロケーション調査で提示した例のインフォーマント調査を行い, このコロケーション調査の有効性を再確認し, さらに他の動詞と名詞のコロケーションに目を向けていく必要がある. この課題については稿を改めて論じたい.

⁹⁾ インフォーマントに提供してもらった英文である.

¹⁰⁾ <http://millsandcompanymeats.com/about/> (2014年11月20日確認)

参考文献

- Fagan, Sarah M. B. (1988). The English middle. *Linguistic Inquiry* 19: 181-203.
- Fellbaum, Christiane. (1985). Adverbs in agentless actives and passive. In; Eifflort, W. et al. (eds.), *Proceedings of the 21st Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 21-31. Chicago, IL: University of Chicago.
- (1986). *On the middle construction in English*. Bloomington, Indiana: Indiana University Linguistics Club.
- Fellbaum, Christiane and Anne Zribi-Hertz. (1989). *The Middle Construction in French and English-A Comparative Study of its Syntax and Semantics*. Bloomington, Indiana: Indiana University Linguistics Club.
- Hunston, Susan. (2002). *Corpora in applied linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Keyser, Samuel Jan and Thomas Roeper. (1984). On the Middle and Ergative Construction in English. *Linguistic Inquiry* 15: 381-416.
- Lakoff, George. (1977). Linguistic gestalts. Papers from the Thirteenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society (CSL13), 236-287. Chicago, IL: Chicago Linguistic Society.
- Oosten, Jeanne van. (1977). Subject and agenthood in English. *Chicago Linguistic Society* 13: 459-471.
- Taylor, John. R. and Yoshimura, Kimihiro. (2006). The middle construction as a prototype category. *Proceedings of the Sixth Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association*, 362-370.
- Yoshimura, Kimihiro and John R. Taylor 2004. "What makes a good middle? The role of qualia in the interpretation and acceptability of middle expressions in English." *English Language and Linguistics* 8.2:293-321.
- 坂本真樹. (2003). 「生態学的知覚論, 心の理論, 属性描写文の認知意味論」山梨正明他 (編) 『認知言語学論考 No. 2』, 157-197. ひつじ書房.
- 佐々木 正人. (1994). 『アフォーダンス-新しい認知の理論』岩波書店.
- 中村文紀. (2010). 「コーパスを用いた中間構文研究: 他動詞構文との比較を通して」日本英語学会第 28 回大会ワークショップ口頭発表. (11 月 13 日)
- 本多啓. (2005). 『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学から見た文法現象』. 東京大学出版会.
- 吉村公宏. (1995). 『認知意味論の方法: 経験と動機の言語学』. 人文書院.
- (2001). 「人工物主語-クオリア知識と中間表現」山梨正明他 (編) 『認知言語学論考 No.1』, 257-318. ひつじ書房.

コーパス

- Davies, Mark (2008 —). *The Corpus of Contemporary American English: 450 million words, 1990-present*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coca/>.